十二年目の映像

帚木蓬生

新潮文庫

昭和六十一年一月二十五日　発行
平成七年六月三十日　二刷

著者　帚木蓬生（はは き ほう せい）
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　編集部（〇三）三二六六―五四四〇
読者係（〇三）三二六六―五一一一
振替　〇〇一四〇―五―八〇八
価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・株式会社金羊社　製本・憲専堂製本株式会社
© Hôsei Hahakigi 1981　Printed in Japan

新潮文庫

十二年目の映像

帚木蓬生著

目　次

一九八一年

十月十九日……七

十月二十日……三

十月二十七日……四八

十月二十八日……六一

十一月四日……七八

十一月五日……九六

十一月十九日……一二四

十一月二十一日……一三九

十二月三日……一五三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

十二月四日……一六三
十二月九日……一七七
十二月十六日……一九一
十二月二十二日……二〇四
十二月二十六日……二一八

解説　高見浩

十二年目の映像

――映像――。これは完全なる敗走である。現実の人間はとっくの昔に安全な場所に身を置き、影だけが映像のなかで代理人として敗走していく。しかし、そんな影を見るためにスクリーンの前に坐っている観客自身は、想念の最後の仕上げをするためにこしらえられた騙し人形なのかもしれない。

（M. Picard）

一九八一年　十月十九日

駅前の大通りを渡って、低い家並の密集した路地を百メートルほどつき入ると、参道に沿った夜店のつらなりが、薄闇のなかに一本、線を引いたように燃えさかっていた。

テレビ漫画の主人公の面や風船、駄菓子を売る出店のあいだに、屋台の飲み屋が適当な間隔で割り込んでいる。イカや臓物の串焼きが芳しく鼻をついた。

真赤なセーターを着た四、五歳の女の子が、金魚を泳がせたビニールの水槽の前にしゃがみこんでいた。紙を張った針金の輪を手に持ち、金魚すくいに夢中になっているのはむしろ父親の方だった。綿入れの襟元をはだけた首筋から顔まで、見事な朱に染まっている。おぼつかない手つきでむやみに水の中をかき回し、紙はすぐに穴があく。そして、紙のたれさがった輪っかを、すわった眼で睨みつけたあと、舌打ちをして地面に叩きつけた。

「親父さん、今夜はこの辺でよした方がいい」

真向かいに腰かけた若い野師がなだめにかかったのが逆効果で、財布から更に千円札を摑み出すと、青年の前につきつけた。

若者がシブシブ渡した輪っかをもぎとって、再び挑んだが同じことだった。金魚が逃げたあとの水を勢いよくすくってまた穴をあけてしまう。野師は黙って、小さなひしゃくで黒の

出目と赤の琉金を掬いあげてビニールの袋に入れた。
「おとうちゃんが全部で六回もやったからサーヴィス」
と、笑いながら釣り銭と金魚を女の子に渡した。父親は口の中でブツブツ言いながらも、娘に請われて、よろよろと立ちあがった。
庸次は歩きながら、空中で金魚すくいの手つきをしてみる。あの父親ほどには酔ってはいないと思う。水面に浮き上がった魚を紙の上で滑らせるようにしてすくい、左手のアルミのコップへもっていけばいいのだ。
そう口の中で呟きながら実際に右手を空で動かしてみたとき、後から来た男に右肩を押され、あやうく前につんのめりそうになった。男はいまいましそうに庸次の方を一瞥したきりで、大股で歩き去った。参道の中央は、あたかも一方通行の車道のように、誰もが気ぜわしく境内の方へ急いでいた。
人波に押し流されながら石の太鼓橋を渡り、境内にはいると、櫓の前に仮設された五メートル四方の小舞台、その前方七、八メートル及び左手前十二、三メートルのところに立つ、テレビ中継用のカメラと照明具がまず目にはいった。中継用のマイクロバスはおそらく境内のはずれに待機しているに違いなかった。
立錐の余地もない程に混み合う人の群れをぬってカメラに近づくと、撮影機の横っ腹に〈帝都放送〉という文字が誇らしげに書き込まれてあった。庸次は思わず苦笑を浮かべ、ヘッドフォンをつけたカメラマンの腕章にも同じ文字があるのを眺めた。群衆の興奮の原因が

どこにあるのかこれで大体察しがついた。舞台に現われる人間を待ち受けているのだ。舞台の下には制服を着た十人程の警備員が、周囲からの人圧を支えるようにして仁王立ちになっている。舞台の外周約二メートルのところに縄が張られていたが、持ちこたえられそうもなく、にじり寄る人の波は警備員に制されてわずかに後退するのみだった。

台本を手にし、やはりヘッドフォンをつけたA（アシスタントディレクター）D（ディレクター）らしい若い男が二人、舞台のそでに立っている。特権者らしいつるりとした表情で観衆を眺め、眉間にわざとらしい皺をつくりヘッドマイクを口許に引き寄せて、中継車に連絡をしていた。

不意に若い女の子たちの歓声が湧き上がる。同時に舞台にスポットがあたる。そのときにはもう、明るいグレーのスーツを見事に着こなしたタレントが、左端から舞台にのぼり、スタンドマイクの前に歩を進めていた。

樺島順だった。人気絶頂という訳ではない。どちらかといえば、峠を越えかけた歌手だろう。にもかかわらず、これだけの人間が殺到するのは、ひととおり名の通ったタレントを自分の目で確かめられ、あわよくば手で触れられるという魅力のために違いなかった。

樺島順はふたことみこと挨拶したあと、マイクから四、五歩さがって待ち構えた。深々としたお辞儀と同時に、音楽が流れだした。カラオケの音は櫓の上、あるいは大木の枝に固定されたスピーカーから聞こえはじめる。

庸次も何度か耳にしたことのある歌だった。樺島順が夏前から歌いはじめた新曲だが、さほど成功しているとも思えない。少なくとも庸次には関心のない曲だ。それでも、間奏で、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

観衆から拍手が湧き、嬌声が飛んだ。

庸次はいらだって腕時計を見た。八時二十分を少し過ぎていた。急いでいる訳でもない、と自分に言いきかせて、前の中年女性の肩ごしに、樺島順の四角ばった顔と、よく動く口を眺めた。歌唱力はあり、声の質にあった曲にめぐりあえばもっと伸びてもおかしくない歌手だった。

曲が終り、拍手の波が寄せて静かに引いていく。舞台上のスポットライトが薄らぎ、ついで境内全体が真暗闇になったとき、庸次は何かが起きたのだと直感した。櫓の灯はおろか、夜店の照明までもがかっ消えていた。ただ空だけがほんのりと赤らみ、そのせいで、人の影、建物と樹木の輪郭は識別できた。

暗闇は五分にも六分にも長く感じられた。闇のなかでも動こうとしない群衆の話し声で、それが事故ではないらしいことを悟った。一体何のための演出か、そう考えながら、庸次は訳もなくいらだちはじめている自分に気がつく。

その時、櫓の右後方の空間がパッと明るくなった。闇に二つの穴が穿たれ、そこから火炎が噴き出してくるような錯覚を受けた。二本の大松明の全容が浮かびあがる。直径一メートル、長さ五、六メートルのものが、大砲のように斜めに据えつけられていた。枯れた杉の葉と松葉が、数十本の雌竹で簀巻きにされたなかで燃えさかる。櫓の上で打鳴らされる太鼓の音に応じるかのように、燃える雌竹の節が破裂し、火の粉が垂れ落ちた。

左側の松明は火の勢いが弱く、白っぽい煙をいたずらに噴きあげるだけだ。褌姿の若者

が松明の上を匍匐しはじめていた。身軽に先端まで行きつくと馬乗りになり、火の粉を片手で払いよけながら、雌竹を締めあげている縄の四、五本をナイフで切りおとす。ナイフを口にくわえなおし、褌の帯に挟んでいたウィスキーの小瓶を松明の先にふりかけた。

火は、窒息から免れたように、燃えあがった。櫓の脇に陣どっている褌の男たちの裸体が赤く染め出された。

テレビの中継カメラはその光と影の動きを一部始終とらえているようだった。右方のカメラは火を噴く松明にフォーカスを合わせ、他方のやや高い位置にあるカメラは、男たちの凜々しい下帯姿を映像に入れていた。更にもうひとつ、ポータブルカメラを肩に担いだ帝都放送の技術部員が、松明の真横に進み出て、観客の興奮した顔を撮影していた。撮られていると意識した女の子がまんざらでもない表情で白い歯をみせる。闇と、松明の火が人々の心を大胆にさせていた。誰ひとりものおじするものがなく、笑い、喚き、大仰な身振りでしゃべっている。

どこか土の臭いのする祭が、テレビ局のカメラの介在によって、輝きを増し、火に油をそそぐ効果をもたらしているかのようだ。これまで幾度となく境内を横切りながら、祭はおろか、縁日さえも出交したことがなかった。ふだんの参道は墓地のように暗く、物音ひとつしない。それが、今は一年分の静寂を一夜にして清算するようなエネルギーを発散させている。その瞬間を切り取り、歌謡番組の中にはめこむ演出は卓抜なものに違いなかった。

庸次はかすかな嫉妬を感じた。同じ帝都放送に勤務しながら、こうした生の現実と映像を

結びつけるセクションには所属していなかった。平たくいえば、非現場の人間だった。出来上がった映像をただ忠実に放映するだけのロボットに似た存在なのだ。

軽い酔いの底から冷え冷えとしたものが沁み出してくる。松明の火が遠去かり、人のざわめき、太鼓の音が心なしか勢いをなくした。

庸次は人垣をかきわけ、やっとのことで境内のへりに出た。テント張りの夜店の裏へまわり、路地にはいったとき、和田英はもしかしたら不在かもしれないと初めて気づく。火祭りの渦のどこかに身を任せて、われを忘れていることだってありうる。

一瞬訪れた躊躇をもみ消すようにして路地の奥に進んだ。なにかで境されたように、ざわめきが途絶えた。右側に安普請のブロック塀が二メートル程の高さで続き、左側は手入れされない生垣が黒々と茂っている。かなり広い庭を隔てて平屋があるはずだが、いつ来ても明りがともっているためしはなかった。傾いた電柱に、投石よけの網をかぶった電球がうす汚れたままで鈍く光っている。その光錐が消え、二つ目の闇にはいるところに車輛の出入りする鉄の門がある。製袋工場だった。従業員六十人程の中小企業で、敷地の一角に社員寮が二棟建っている。古びた木造二階建のため、社員からは好まれず、三分の一は空部屋だった。英は、工場主の息子の家庭教師として、そのうちの一部屋をただで借り受けていた。

二階の端の英の部屋が暗いままになっているのに落胆しながらも、庸次は門の脇の木戸をあけ、敷地にはいった。寮のドアを押し、靴を下駄箱の隅に入れてから、音をたてないように階段を登った。

真中に廊下があり、左右に五つずつ部屋が並んでいる。案の定、英の部屋のドアには鍵がかかっていた。小さくノックをしたが、返事はなかった。

くびすを返し階段を降りかけたとき、反対側の部屋の戸が開いて、女が顔を出した。

「和田さんなら、三十分くらい前に出ていきましたよ」

下顎を突き出して言うと、ピシャリとドアを閉めた。とりつくしまもなかった。

イヤな女だった。いつか日曜日の昼間、予告なしに英を訪ねたときもやはり不在で、廊下の窓に洗濯物を干していたその女が、（和田さんはきのうから留守です。その前の晩は男の人が泊まっていきましたよ）と、聞きもしないのに言った。

この時刻に外出するとすれば、やはり祭の人混みの中にいるのかも知れない。庸次はしぼみかける気持を支えて路地を引き返した。

松明は相変らず火をふいていた。参道に散っていた見物人も境内に集まりはじめていた。二つの火の下に、いま褌の男たちが勢揃いしている。小学生くらいの子供から、腹のつきでた中年まで、一様に白い褌と鉢巻だった。若者たちは、二メートル近くはある、先が二またに分かれた長い樫の枝を持ち、年配の男たちは、葉の茂った短い枝を手にしていた。若者たちの酒気を帯びた顔が紅潮し、足取りが危かった。

櫓の太鼓が単調なリズムにかわり、次第に間隔が長くなっていく。男たちは二群に分かれて、大松明を包囲する。十人が松明の下に樫の棒をつきたて、屈強な六人が松明を支える台座の横に身を寄せる。年配者たちが、落ちかかる火の粉を樫の葉で払い、少年たちは、松明

の尻から出る四本の太縄を地引き網をひくように二手にわかれて前方にもっていく。
掛け声と共に樫の棒がしなり、大松明の砲身がわずかに持ちあがった。同時に、縄が前方にたぐり寄せられ、台座がドドッと五十センチばかり進んだ。その繰り返しだった。前進するたびに、火が揺れ、人垣がどよめいた。
雌竹の節が破裂すると、火の粉が男たちの裸の肩に油のように垂れおちた。若者たちは火の粉を嫌ってなるべく外側に立って樫の棒をあやつろうとするが、それでは松明は持ちあがらない。年寄りが木の枝で火を払い、若い者を松明の下に押しやる。五十センチずつ、二つの松明は尺とり虫のようにして進んだ。
群衆も火の御輿(みこし)について移動する。どの顔も赤く染まっている。煙が風にあおられて横になびくと、女たちが悲鳴をあげた。
定位置にある二台のテレビカメラは冷静に群衆の反応を写しとり、ポータブルカメラは松明の動きを追っていた。これだけ長い時間をかけるとすれば、中継ではなく録画なのかもしれなかった。火祭りの光景を自由自在に歌番組のなかに折り込んでいくか、あるいは全国何ヶ所かの火祭りを特集した番組なのか。と、そこまで考えて苦笑してしまう。どっちでもいいことなのだ。少なくとも今の自分には無関係のことだった。
英を探した。火に照らされる若い女の顔をひとつひとつ確かめる行為が、途方もなく馬鹿げた作業のように思えた。むこうからこちらに気づくことだってあり得る、と考えることが気安めにはなった。前後して移動する松明を楕円(だえん)形に遠巻きにする人の群れを、肩ごしに眺

めては、反対側に移動した。自分の眼の中までも赤く染まっていくようだった。ワッショイ、ワッショイという掛け声だけが、絶えず耳に響き、焦燥を更に深めた。

男たちが樫の枝で振り払った火の粉が頬をかすめた。目の前を通り過ぎる裸の男たちの肩に、黒い灰がこびりついているのが分った。庸次は目を細め、火の粉の向こう側の観衆の顔をもう一度眺め回した。

そのときだ。名が呼ばれ、軽く肩を叩かれた。

「あなた、来てたの」

英の白い顔が触れ合うほどの至近距離にあった。

「さっき、アパートまで行ってみたさ。来てみたら祭だから、驚いたよ」

庸次は、太鼓の音に対抗してはり上げた自分の声が弾んでいるのに気がつく。

「祭のことは私も知らなかったのよ。夕方、学校から戻ってきてはじめて分ったの」

かすかに顔を傾けたとき、まだ乾ききっていない髪が快く匂った。薄紫のセーターに、同色のカーディガン、黒いスカート、それらが湯上がりのからだを薄衣(うすぎぬ)のように包みこんでいた。

「アパートで、誰からか見られた？」

「向かい側の年増(としま)に会った。和田さんところには、男の人が入れかわりたちかわり来ますね、とさ」

庸次はそう言いながら、英の眼の反応をさりげなく見守った。大きく見開かれた眼は、微

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com